



# 日本組織培養学会

## 会員通信

### 第122号

平成21年10月15日

発行者

\* 坂野 俊宏 (株式会社マンダム)  
伊藤 丈洋 (株式会社細胞科学研究所)

\*責任者連絡先

〒540-8530

大阪市中央区十二軒町5-12

株式会社マンダム 中央研究所

研究管理室

TEL : 06-6767-5024

## 目次

1. 新会長就任ご挨拶	鈴木 崇彦	2
2. 平成21年度第1回幹事会議事録	藤井 万紀子	3
3. 第82回大会を終えて		
大会世話人報告	間中 研一	4
	星 宏良	5
	高橋 君子	6
奨励賞審査結果	浅香 勲	7
奨励賞受賞者感想文	松本 真司	7
	村田 等	8
	館山 大輝	8
4. 平成21年度第2回幹事会報告		
平成20年度決算報告	鈴木 崇彦	9
平成21年度予算	鈴木 崇彦	11
情報技術利用委員会報告	坂野 俊宏	12
教育システム委員会報告	古江-楠田 美保	13

## 1. 新会長就任ご挨拶

「培養する」とは「創る」こと

4月より日本組織培養学会第8代会長に就任いたしました鈴木崇彦と申します。会長就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

日本組織培養学会が研究会からスタートして52年になります。この間に、生命科学研究において細胞培養技術は無くてはならないものとなりました。また、細胞培養が手軽に行える環境がすぐに手に入ります。しかし、その陰で、培養技術の基礎や、機器の取扱い方、トラブル対応能力などについては非常に危うい状況と言わざるを得ません。無菌操作について多少の経験を積めば、細胞を「生かしておく」こと自体は決して難しくはありません。しかし、細胞を「生かしておく」と「培養する」ことの間には大きな隔たりを感じます。細胞を「培養する」とは、研究目的のために組織から取り出した細胞を環境に馴化させ、様々な因子を制御することによって研究の目的に合致した細胞を「創る」ということではないかと思うのです。「細胞をこうすれば、こういう事が解明できる」という、強い研究目的をもって細胞を「創る」ことが「培養する」ことではないかと思えます。

そう言う観点に立てば、培養はそう簡単なものではなく、非常に神経を使う操作になるはずで。

以前、「正常二倍体細胞には分裂寿命がある」ことを発表し、細胞老化の分野を切り開いたヘイフリック先生をシンポジウムにお招きしたときに、ある先生が、「細胞が増えなくなる、というネガティブなデータを発表しようと思った経緯は？」という質問をされ、それに対する回答は、正確では無いかもしれませんが「決まった人による決まった手法での繰り返し実験と、その結果に対する信念」というようなものだったと思います。「できない」ことを発表することの難しさをどう克服したのか、私も大変興味をひかれた質問でしたが、この「信念」を支えた培養操作に「細胞培養」の神髄のようなものを感じました。確固たる目的に向かって細胞を維持する、創り上げることが「培養」を冠する当学会の使命ではないかと改めて強く感じた次第です。会員の皆様にもぜひそのような情報を、年次大会において発信して頂きたいと思えます。

平成20年12月から新しい公益法人制度が施行され、どの団体も今その移行期間にあり、近々に、当学会も公益法人となるのか、任意団体として活動するのか、結論を迫られています。どちらになるにしても一長一短があります。しかし、どちらになるにしても絶対に必要なことは、会計の透明性、合理性を高め、活動には計画と報告が必要になるということです。そのための会則の改正や、細則の変更なども必要になるかもしれません。これらの改正や変更に当たっては、事前にその背景や改正案を会員の皆様にお示していく予定ですが、この作業についてもぜひ積極的なご意見ならびにご支援を賜りたいと思えます。

最後に、私などが学会の会長をお引き受けして良いのだろうか、と、悩み続けているというのが偽らざるところです。しかし、当学会を取り巻く状況や、目の前にある諸問題に対し、幹事の皆さん、各専門委員長の皆さんのお力をお借りしながら淡々と取り組んでいくことしか出来ないと思直しています。会員の皆様には学会行事に積極的な参加をお願いし、ご支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

東京大学大学院医学系研究科  
附属疾患生命工学センター  
放射線研究領域 鈴木 崇彦

## 2. 平成 21 年度第 1 回幹事会報告

日時:平成 21 年 4 月 11 日

場所:東京大学大学院医学系研究科・教育研究棟2階会議室

出席者:鈴木崇彦、間中研一、星 宏良、高橋君子、中村幸夫、古江-楠田美保、浅香 勲、藤井万紀子、坂野俊宏、佐藤元信、小原有宏、伊藤丈洋

[平成 21 年度第 1 回幹事会議事録]

### 議 題

1. 会計報告の作成と学会運営における会計のバランスシートについての執行役員間の意見交換と認識の共有について
2. 学会会則等の整備、改訂の必要性和、新法人への移行の是非についての議論
3. 奨励賞選考規定の改正の必要性的の有無について
4. 新しい専門委員会の提案に対する採択の可否
5. 継続専門委員会(教育研究システム、編集、情報)の活動計画と予算申請についての審議
6. 編集委員長の交代について(提案)

### 学会会則等の整備、改訂の必要性和、新法人への移行の是非についての議論

日本組織培養学会会則改訂案について浅香先生より改定案が提案された。

また、学会の組織形態について現在の任意団体から公益法人に移行することによるメリット、デメリットについて協議を行った。

### 奨励賞選考規定の改正について

日本組織培養学会奨励賞選考規定改正案が教育担当幹事 浅香先生より提案された。

### 新しい専門委員会の提案

〈テクニカルアーカイブ委員会設立の提案〉

浅香先生より初代培養細胞の樹立等、先人が確立した培養技術の継承を目的としてテクニカルアーカイブ委員会設立が提案されました。

活動費用:初年度の計画策定会議費用、動画撮影費用として 30 万円を計上する。

〈倫理委員会〉

倫理委員会の存続について審議を行った結果、当委員会は終了とすることとする。

今後は、中村先生(理研)、小原先生(基盤研)に文部科学省、厚生労働省からの関連情報収集をお願いする。

#### 〈細胞バンク委員会〉

細胞バンク委員会の存続について審議を行った結果、当委員会は終了することとする。ただし、将来的に必要な場合が生じた場合に再度立ち上げる。

古江先生(基盤研)、中村先生(理研)と相談の上、細胞バンクについて学会または委員会主導でやるかどうか、学会員の意向についてアンケートを行うこととする。

#### 継続専門委員会(教育研究システム、情報)の活動計画と予算申請についての審議

##### 〈教育システム委員会〉

細胞培養基盤技術コースについてベーシックコースIIを設立することとする。

ベーシックコースIの指導者認定資格およびコース開催基準について、さらにコース修了者に対する認定要件についての審議を行った。

##### 〈情報委員会〉

委員長は、間中先生から坂野先生に引き継がれる。サーバー代替時の費用として、予算 25 万円を計上する。

#### 編集委員長の交代について

元来編集委員会は幹事会とは別個の活動を行っており、規則も独自に立ち上げたものである。これまでは広島大学岡本先生が実務および編集を行っていた。新年度にあたり、新しい編集委員長を決め、活動を継続することが、星先生から提案された。協議の結果、編集委員会を一旦幹事会に吸収し、編集委員長は幹事会扱いとする。連絡先は、鈴木会長が岡本先生と連絡を取りながら行っていくこととした。

(議事録： 藤井 万紀子)

### 3. 第82回大会を終えて

#### 第 82 回大会を開催して

大会世話人代表 間中 研一

獨協医大(栃木)では高岡聰子先生が主催されたのち、26年の月日を経て3回目の大会となりました。研究会時代来の先生方には、この地を懐かしくお感じ頂けたのではないのでしょうか。

今期、幹事の若返りや若手会員の加入傾向をとらえて、この大会では学会の基礎と将来を繋ぐ内容を盛り込みたいと考え、主催3名の力を合わせて少し欲張った企画をこなすことにしました。会期の大半を「培養細胞に生命を託す＝医療へ向けての細胞培養研究」のテーマに当てました。基調講演の難波正義先生には、「培養細胞でノーベル賞を狙え！」の檄を受け、本会特別講演としてお招きした東北大・西田幸二先生には培養細胞の再生医療応用最先端のお話をいただきました。また、続くシンポジウムにおいては基礎・医療・創薬の3部、計12名の先生方にES・iPS細胞の研究現状をご披露いただき、将来への期待がさらに高まるとともに、同時に基礎研究の重要性が強調されました。細胞培養の管理技術普及を目的とする培養講習会開催は、これら

の研究のバックボーンであることを再確認し、今後も継続すべき活動であることを裏付けられた感がしました。

教育講演は、自称御年 80 歳にしてなお現役で培養を続けておられる高岡先生にお願いしました。DM-200 という成長因子類を全く添加しない無タンパク・無脂質培地で、数十年、安定的に生きる細胞や、1 年以上も培地交換無しに生き続ける細胞やら、の様々な「不思議」について語られ、フロアの驚きを喚起しました。諸先輩たちの細胞への思いと、湧きあふれ出る発想は、続く者に共通の意識として刻まれたものと思います。

「組織培養学」という「学」が囁かれて久しいところです。ES・iPS 細胞の発明発見が、「細胞から組織への分化」という生命科学の夢そのものを担っていることから、「学」への求心力がここに来てさらに強まったのではないのでしょうか。シンポジウムはもとより、ワークショップおよび一般講演においても、“細胞を操作する”という作業意識が、さらに「学」の重み加えて発展していくような気が致します。

黒田行昭先生が急逝されてちょうど 1 年となりました。追悼合同シンポジウムを開催させていただきましたが、やはり、黒田先生にはフロアから温かいお声をおかけいただくのが最もこの学会に似合った風景であったことを、あらためて感じました。これからは、天からお見守りいただくわけです。

末筆ながら、遠方より当学会のためにお出で頂いた各講師・演者の先生方に、その貴重なご講演を頂きましたことを敬意の念をもってお礼を申し上げます。一方、プログラム企画の関係で、一般演題でのご発表を十分にお受けできませんでしたことをお詫び致します。

共同主催人であり、星 宏良、高橋君子両先生に代わりまして、皆様方から頂いた熱いご支援に感謝いたします。

## 第 82 回大会雑感

大会世話人 星 宏良

今年の培養学会大会は、平成 21 年 5 月 18～19 日、独協医科大学で開催されました。獨協大学の間中研一先生、会津大学高橋君子先生と一緒に大会世話人の一人として名前を連ねることになりました。北関東、東北地区の幹事で大会をお世話することになったことが、この始まりです。今大会の発表演題を見ると、これまでの大会とは内容が大きく異なっていると感じました。数年前までは、癌の研究に係る発表が多かったと記憶しております。最近の傾向としては、ES 細胞、iPS 細胞、組織性幹細胞など未分化な細胞を扱った研究発表が著しく増加してきていると感じております。細胞培養研究も再生医療などの臨床応用を目指した研究にシフトしつつあることの証左と受け止めております。

一方で、培養学会の歴史の古さと先人における優れた貢献を改めて実感する大会でもありました。昨年の培養学会で元気な姿をお見受けしました黒田行昭先生(元会長)が、学会後すぐにご逝去されたと聞いたときは、驚きと失望を同時に味わいました。本大会では黒田先生の合同追悼シンポジウムが企画されましたが、先生の多方面における生命科学分野への貢献の足跡には頭の下がる思いがしました。元学会会長の難波正義先生による基調講演では、先生の発癌や細胞老化の研究の成果と同時に先人の偉業についてエピソードを交えてお話いただき、興味をもって聞かせていただきました。今年、米国 Society for In Vitro Biology から特別賞を授与されると伺っております。日本組織培養学会員の一人として、大変誇りに思います。また、高岡聰子先生のお話といい、培養学会の歴史の長さとお先人における細胞培養における多くの成果が、今日の培養技術の進歩に大きく貢献していると感じないわけにはいきませんでした。

古い歴史の上に新しい胎動も始まり、研究の大きな潮流となっております。再生医療分野での幹細胞の培養を基盤にした研究の進展には、目を見張るものがあります。細胞培養も専門技術者における秘技や奥技と言われた時代から、組織培養研究者のみならず、生命科学を研究する多くの研究者にとって必須の技術と認識される昨今となりました。このことは、研究者の広がりに伴って、しっかりした細胞培養知識や技術を学会として発信しなければならないと痛切に感じております。このような観点からも、細胞培養士指導者養成などの企画は、当面は微力なスタートでも、培養学会の存在価値を世に知らしめるよい企画と考えております。本大会が、参加者の皆さんにとって貴重な情報やアイデアを得ることに一助となれば幸いです。2日間という短い制約された時間ということで致し方ないと思いますが、培養学会の本来重視してきた一般講演の時間を十分取れなかったことは少し心残りとなっております。

大会の計画が半ば決まった段階で、世の中が世界的な経済不況の嵐に見舞われ、大会運営に必要な収入が集まるのか、また、参加者が期待したほど集まっていたか、大変心配しました。しかし、大会世話人、各企画責任者など多くの方々の努力と協力の結果、資金的に問題もなく、予想した以上の参加者となり、充実した大会となったことは、大会主催者の一人として感謝するしだいです。

最後に、今大会を成功に導いていただいた多くの関係者の皆さんに厚く御礼を申し上げます。特に、会場の準備や講演者のスケジュール調整など、全体にわたってのコーディネーターとして奮闘いただいた代表世話人の間中先生にこの場を借りて心より御礼を申し上げます。

## 第 82 回大会を終えて

大会世話人 高橋 君子

日本組織培養学会第 82 回大会を平成 21 年 5 月 18、19 日に、獨協医科大学・創立 30 周年記念館(栃木県壬生町)において開催いたしました。

今大会の中で、昨年の大会直後に急逝された黒田昭行先生の追悼シンポジウムが日本環境変異原学会、日本動物実験代替法学会、日本組織培養学会合同で行われました。黒田先生のご長男黒田壽祐様にご列席され、先生と一緒に研究されていた、森脇和郎先生、木苗直秀先生、小島肇先生、加治和彦先生より、黒田先生の業績と研究に対する姿勢をご講演いただき、先生の偉大さを再確認し、研究意欲を駆り立たせていただきました。黒田先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

本大会は、「培養細胞に生命を託す—医療に向けての細胞培養研究—」という大会テーマで、ES・iPS 細胞研究に特化した、シンポジウム、特別講演、ワークショップを開催しました。シンポジウムは、基礎研究・再生医療・創薬の 3 セッションに区分され、特別講演は、東北大学大学院・西田幸二先生の眼科領域の再生医療について、ワークショップは、ES 細胞の再生医療について多く参加者の方々に活発な意見交換が行われました。これらの中で再生医療へ細胞培養技術の応用を行っているさきがけ研究の発表も多くなされ、細胞培養の大切さを再確認できた大会だったと感じました。

また、SIVB Life Time Achievement Award を受賞された名誉会員・難波正義先生の基調講演、高岡聡子先生の教育講演があり、先生方のご経験から細胞培養の不思議さと可能性についての講演は、細胞培養に対する「わくわく感」を新たにさせていただきました。さらに、細胞培養士認定指導者講習会が行われ、今後正しい細胞培養技術を広く普及されることが期待されます。

最後に、本大会は世話人3人体制で開催されましたが、実質上間中研一先生、星宏良先生の絶大なご尽力で開催されました。ご理解とご協力を賜りました会員および参加者の皆さまに心より感謝いたします。

## 日本組織培養学会奨励賞審査結果

平成21年度の日本組織培養学会奨励賞の審査は、例年と発表形式を変えて第82回学術大会の冒頭口頭発表形式によって行われました。奨励賞の審査に当たった先生方は、審査基準に則った非常に公平な採点を実施され、以下の結果となりました。

応募された演題は4題で、「Wntシグナル関連分子Dishevelledによる上皮極性・形態形成制御機構についての解析」を発表された広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 分子細胞情報学研究室の松本真司さん、「BRPK/PINK1のmTORC2活性化を介したがん進展への寄与」を発表された岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 細胞生物学分野の村田 等さん、「分化ヒトES細胞から中内胚葉へのラミニンによる分化促進効果」を発表された(独)医薬基盤研究所 基盤的研究部 遺伝子導入制御プロジェクトの稲村 充さん、「無血清培養下におけるヒト胚性幹細胞ならびに人工多能性幹細胞のインテグリン発現プロファイル」を発表された(独)医薬基盤研究所 生物資源研究部門 細胞資源研究室の館山大揮さんの4名全員が基準を満たしていたため受賞者に選出されました。受賞者には学術大会2日目に開催された平成21年度日本組織培養学会総会において、賞状、ならびに副賞が、鈴木会長より授与されました。今回は例年と異なり口頭発表の形式で審査したためか、質疑応答面での評価等で受賞者間の評点に多少差が見られましたが、細胞培養を用いた研究を行う上での方法論と研究の理解度等が一定の基準を満たしていたため全員受賞となりました。各受賞者には今回を契機に今後進への範となるようさらに研鑽をつまれ、本学会での活躍を期待したいと思います。

(文責:奨励賞・学術担当幹事 浅香 勲)

## 平成21年度日本組織培養学会奨励賞受賞者感想文

広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 分子細胞情報学  
松本 真司

この度は日本組織培養学会若手奨励賞という大きな賞をいただき、大変光栄に思っています。今回の研究につきましては、この機会を与えて下さいました広島大学大学院 分子口腔医学・顎顔面外科学の岡本哲治教授をはじめ、ご助言等を頂きました諸先生方に心より御礼申し上げます。

私は現在、広島大学大学院 分子細胞情報学研究室で Wnt シグナル経路の研究に携わらせていただいております。Wnt シグナルは遺伝学・発生生物学的研究から多くの生物の発生過程、また大腸癌をはじめとした多くの疾患の病態形成に関与することが知られています。しかし、実際自身で Wnt シグナルについての研究を行ってみると、これまでの培養皿上での単純な培養系(単層培養系)では生体で見られるような多彩な Wnt 関連の細胞機能制御を再現することが困難であることに気がきました。そこで今回の研究のテーマの一つである三次元培養系を用いて解析を行うことにしました。実際に、三次元培養法を用いると、これまではみることができなかったような関連分子の挙動、細胞集団の形態形成や極性形成を解析することができました。昨今のインパク

トの高い研究論文では、必ずといっていいほど *in vitro* の培養細胞を用いた分子メカニズムの解析に加えて、マウス等を用いた *in vivo* の解析の両者が求められていると感じます。このような流れの中で、*in vitro* と *in vivo* の間を埋める意味での初代培養系、三次元培養系や器官培養系のような、より生理的な培養技術の必要性やニーズは今後ますます高まっていくと思います。

今後も、日本組織培養学会への参加を通じて、多くの培養技術や最新の研究内容を学ばせていただきたいと思っております。今回の受賞を励みとし、より一層研究活動に取り組んで行く所存ですので、今後とも皆様方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 細胞生物学分野

村田 等

この度は日本組織培養学会第 82 回大会におきまして、“BRPK/PINK1 の mTORC2 活性化を介したがん進展への寄与”の発表で奨励賞を賜り、大変光栄に思います。BRPK/PINK1 は我々が胎盤形成過程と転移能の異なるがん細胞株を用いた遺伝子発現解析から浸潤に関わる遺伝子として単離した遺伝子です。その後、BRPK/PINK1 はパーキンソン病の原因遺伝子の1つであることも明らかとなり、大きな注目を集めています。しかし、その機能についてはほとんどわかっていませんでした。そこで我々は BRPK/PINK1 がどのようにしてがんの進展に関与しているかを探求し、全く新しく BRPK/PINK1 ががん悪性化の枢軸を担う mTORC2 と結合し、活性化することを見出しました。mTORC2 は細胞の生存に必須の分子である Akt や細胞運動の増進につながる Rac1 の活性化をもたらします。実際、BRPK/PINK1 を強制発現すると酸化ストレス等の様々なストレス刺激によるアポトーシス誘導に抵抗性になると同時に培養内浸潤能が亢進することを確認しました。この発見はがんの研究のみならず、神経細胞の細胞死抑制機構などパーキンソン病の研究にも貢献するものと考えられます。

今回の学会大会では、教育講演として高岡聰子先生の発表がありました。50 年もの間、細胞を一度も絶やさず維持されているということに、驚きとともに高岡先生の研究や細胞に対する熱意や深い愛情を強く感じました。私も更に細胞・組織培養の勉強に励み、自らの研究に情熱をもって取り組んでいきたいと改めて思いました。

大会中は鈴木崇彦学会長をはじめ日本組織培養学会の皆様方に本当にお世話になり、厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、これからも一生懸命研究に取り組みたいです。また来年度は岡山で第 83 回大会が行われます。許南浩先生のもと、学会のお役にたてるように準備を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

医薬基盤研究所

館山 大輝

日本組織培養学会第 82 回大会で奨励賞を頂きました。日本組織培養学会の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

今回発表させて頂きました演題は、「無血清培養下におけるヒト胚性幹細胞ならびに人工多能性幹細胞のインテグリン発現プロファイル」です。従来の培養法では、血清やフィーダー細胞を使用するため、培地中に含まれる不確定因子の影響で、ES/iPS 細胞の創薬研究開発、毒性評価試験等への利用が困難なものでした。そこで、私たちの研究グループは無血清培地 hESF9 を開発しました。この hESF9 を用いて、コラーゲン上で培

養を行ったところ、ES 細胞 HUSE-1 は 25 代以上継代培養可能である一方で、別の ES 細胞株 KhES-1 では、コラーゲンに接着しにくい為、継代維持が難しいといった違いがありました。そこで、私たちは、HUSE-1 と KhES-1 の各細胞外マトリックスでのアタッチメントアッセイを行い、その結果、ファイブロネクチンに、HUSE-1 と KhES-1 とともに接着することがわかりました。

また、リアルタイム PCR によるインテグリンの発現解析を ES/iPS 細胞で行ったところ、細胞株で共通してファイブロネクチン受容体を構成するインテグリンサブユニットの発現が確認されました。以上の結果により、ファイブロネクチンは様々な細胞株に接着する汎用性の高い細胞外マトリックスであることが示唆され、今後の無血清培地を用いた培養法に有効であると考えられます。このような研究を進めることができましたのも、医薬・基盤研究所の方々、古江-楠田美保 先生のご協力、ご指導があったおかげです。深く感謝申し上げます。

また、発表の際には諸先生方に多くの大変参考になるご質問、ご意見を頂きましたことを、感謝しております。頂いた賞を励みとして、今後の研究に努めていきたいと思っております。

#### 4. 平成 21 年度第 2 回幹事会報告

##### 平成 20 年度決算報告

##### 平成 20 年度決算書

(平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日)

##### 一般会計

収入の部		(単位:円)	
勘定科目	平成 20 年度予算額	平成 20 年度決算額	備考
前年度繰越金	2,353,048	2,353,048	
正会員会費	1,500,000	1,659,000	228 名 + 学生会員 21 名
賛助会員会費	500,000	450,000	13 社
入会金	20,000	48,000	
広告収入	200,000	60,000	日本出版著作権協会
雑収入	200,000	257,673	別刷り収入、印税、金利
購読料	200,000	189,750	
合計	4,973,048	5,017,471	

支出の部		(単位:円)	
勘定科目	平成 20 年度予算額	平成 20 年度決算額	備考
研究誌発行費	1,700,000	1,482,600	27-1, 2・3, 4
会員通信発行費	150,000	75,600	(119-120), 121 号
大会補助金	600,000	103,229	SIVB へ送金(第 81 回大会は 0 円)
業務委託費	1,150,000	1,058,192	管理費、会費請求、会誌発送等
幹事会議費	20,000	0	

編集会議費	20,000	0
雑費	20,000	0
予備費	20,000	0
支出計	3,680,000	2,719,621
残額	2,197,117	2,297,850
合計	5,877,117	5,017,471

### 特別会計

収入の部 (単位:円)			
勘定科目	平成 20 年度予算額	平成 20 年度決算額	備考
前年度繰越金	7,181,884	7,181,884	
寄付金収入	100,000	0	
出版収入	20,000	22,238	許先生より
利子収入	8,000	8,436	普通預金利息
雑収入	20,000	201,240	学術調査、NPO 医学中央財団
第 81 回大会収支		2,111,206	
広島大学細胞培養指導料		98,000	14 名@7,000
講習会テキスト収入		189,000	(63 冊分)
合計	7,329,884	9,812,004	

支出の部 (単位:円)			
勘定科目	平成 20 年度予算額	平成 20 年度決算額	備考
学会奨励賞	300,000	100,000	第 81 回大会奨励賞
細胞バンク委員会	50,000	0	
倫理問題検討委員会	200,000	-326002	
教育システム委員会	300,000	300,000	
サーバー購入費	250,000	0	
In Vitro Biology 共催費	100,000	0	
雑費	300,000	167,040	振り込み手数料、幹事会旅費
支出計	1,500,000	241,038	
残額	4,361,132	9,570,966	
合計	5,861,132	9,812,004	

平成 20 年度決算は、DS ファーマバイオメディカル 上田 忠佳先生 と 岡山学院大学 宮崎 正博先生 の監査・承認をいただきました。

## 平成 21 年度予算案

(平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日)

### 一般会計

(単位:円)

前年度繰越金 2,297,850

#### 収入の部

勘定科目	平成 21 年度予算額	備考
正会員会費	1,600,000	
賛助会員会費	450,000	
入会金	50,000	
広告収入	60,000	
雑収入	400,000	別刷り収入等
購読料	150,000	
事業収入(培養コース)	150,000	広島大、コース I
合計	2,860,000	

#### 支出の部

(単位:円)

勘定科目	平成 21 年度予算額	備考
研究誌発行費	1,600,000	
会員通信発行費	100,000	
大会補助金	600,000	
業務委託費	1,100,000	組織培養研究アップロード費用を含む
幹事会議費	300,000	幹事旅費
HP 維持等経費(情報)	50,000	
雑費	50,000	通信費、振込手数料等
予備費	100,000	
合計	3,900,000	

単年度収支 -1,040,000

次年度繰越金 1,257,850

### 特別会計

(単位:円)

前年度繰越金 9,570,966

#### 収入の部

勘定科目	平成 21 年度予算額	備考
利子収入	8,000	
テキスト収入(返金)	100,000	
合計	108,000	

(単位:円)

勘定科目	平成 21 年度予算額	備考
学会奨励賞	300,000	第 82 回大会奨励賞
教育システム委員会	300,000	
サーバー購入費	250,000	
アーカイブ委員会	300,000	
合計	1,150,000	

単年度収支	-1,042,000
次年度繰越金	8,528,966

## 情報技術利用委員会 2009 年度計画について

今年度より情報技術利用委員会の委員長を拝命いたしました坂野俊宏でございます。よろしくお願いいたします。早速ですが、今年度の当委員会の計画についてご報告申し上げます。

### ◆取り組み内容/方針

#### ① 学会 web/e-mail による情報提供の継続

これまでに構築された学会ホームページやメーリングサービスによる情報の提供/配信については継続してその維持メンテナンスを行います。

#### ② 学会 web/e-mail システムやサイトの拡充

さらに、より見やすく使いやすいウェブサイトになるよう進化・改良に取り組みます。例えば、

i) 学会ホームページ入り口を、学会員向けと未入会者用に分けるなど、利用者それぞれの目的や必要とする情報検索をしやすくする

ii) 幹事の先生方の情報発信を直接化(自動化)することによるスピードアップする などです。

#### ③ 委員の役割分担と連絡・連携の強化

これまで、一部の方に負担が集中していましたが、委員会としてやるべきことを共有し、また、委員それぞれの役割を明確にすることで、個々の負担を軽減しつつリスクを分散します。

活動内容詳細につきましては、今後委員会にて協議してまいります。

### ◆委員(各先生にご協力をお願いし、快諾を得ております)

間中 研一 先生<獨協医科大学>、伊藤 文洋 先生<株式会社細胞科学研究所>、山本 直樹 先生<藤田保健

衛生大学)、坂野 俊宏(株マンダム)

◆予算(総会にて、下記予算のご承認をいただきました)

250 千円 サーバー購入費用(バックアップ用として毎年度計上しております)

100 千円 活動費/会議費(旅費交通費含む){委員間の打ち合わせ等に使用します}

その他、委員会の名称については、『情報技術利用委員会』は長いのではないかとのご意見もございます。親しみやすく覚えていただきやすい名称に変更するか検討中です。

以上、簡単ではございますが、今年度の情報技術利用委員会の活動計画です。当委員会の活動や学会ホームページ、情報技術の利用に関してなど、皆さまのご意見・ご要望、ご提案などございましたらお寄せいただければ幸いです。ご支援のほどよろしくお願いいたします。

(文責:坂野 俊宏)

### 教育研究システム委員会の本年度の活動報告

21 年度より鈴木会長より本委員会の委員長を拝命しました。深刻なクロスコンタミネーションやマイコプラズマ感染などが報告されている一方で、再生医療や薬剤毒性評価に培養細胞の利用が注目されています。安全に、高品質な培養細胞を使用して、科学的に安定した結果が産生されるために、培養技術を標準化していくことを目的として活動していきたいと考えております。その一環として、培養実習を行い、「日本組織培養学会認定細胞培養士」(仮称)育成のプログラム設定を行いたいと思っておりますので、皆様のご協力をお願いしたいと思っております。今年度は培養細胞の品質管理法を理解し、細胞を用いたアッセイが行えることを目標とするコースの立ち上げを行いたいと考えております。

培養学会におきます培養実習は会員の皆様に納得いただけるような品質を維持していきたいと思っております。まずは、皆様に共通の認識を持っていただくために、過日の大会においてインストラクター対象セミナーを開催致しました。受講頂きました方々には、受講証の発送を予定しておりますが、遅れております。現在、準備しておりますので、いましばらくお待ちいただきますようお願いいたします。

以上のような活動を行うことを予定しております。検討事項が多くありますために、30万円の活動費を計上し、総会にて承認いただきました。活動内容につきましては、逐次、経過をご報告させていただきたいと思っております。

(文責:古江一楠田美保)

### 【編集後記】

会員通信担当として今号より編集を担当することになりました。初めてのことで、発行まで随分手間取ってしまい、皆さまにはご迷惑をおかけいたしました。今後とも会員の皆さまへのタイムリーで正確な情報発信を心がけ務めさせていただきますので、ご指導・ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。(ts)

新年度より新幹事として編集を担当させていただいております。不慣れな発行担当者にも係らず、早々に原稿をおよせいただきました会員皆様に改めて御礼申し上げます。次号は次期大会ご案内を含めた通信を来年1月に発行いたします。会員皆様の情報発信をいつでもお待ち申し上げます。(ti)